

45歳

【第三章】精神文化事業に邁進



貞一兄さん、
農村の女子のための
学校を作りたいのです。

それなら、
この佐賀に
作つて
くれないか。

農村工芸学院

学校は、佐賀県神埼市に
生家の隣に建てられ、
「農村工芸学院」と
命名されて1928年(昭和3)年に開校
しました。

デンマークの国民
高等學校・イギリス
のカレッジ・日本の
寺子屋制度をモチーフ
とした、全寮制でした。

わかった。
わかると生徒と
ふれあいたいし、
東京から佐賀は遠い。
兄さん、学院のことは
お任せします。

その一方で、邦彦はどんどん忙しくなり、
1933(昭和8)年に学院の経営から撤退しました。

しかし、女性の社会的自立を目指す教育は、

当時なかなか受け入れられず、
生徒数は年々減少していきました。

この研究所から、
日本の文化を高め、
世界の文化に貢献する
人を育てる、そのためには
私の全生涯を捧げます。

そして、1929(昭和4)年2月、研究所設立の趣意書を
表明しました。

邦彦は、計画を研究所の設立に変更し、図書館はその
附属施設としました。

建設開始前の風景

1928(昭和3)年、
邦彦は図書館建設
用地として、
東横線の大尾駅
(現在の大倉山駅)
脇の小高い丘を
東急電鉄から
購入しました。

ここがいいですね。
広さが欲しいです。

東急電鉄創業者
五島慶太

わかりました。



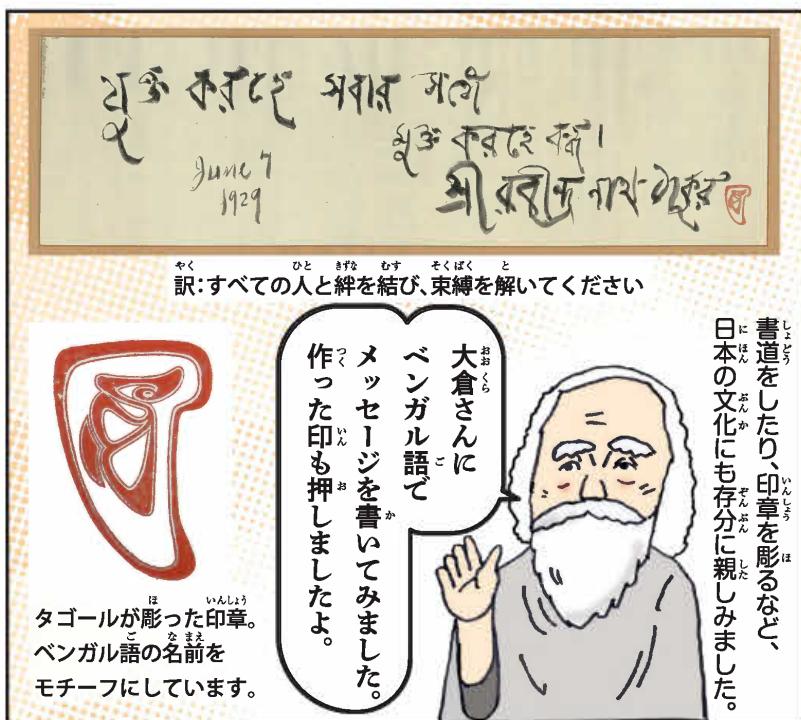
あみものじゅう
編み物の実習



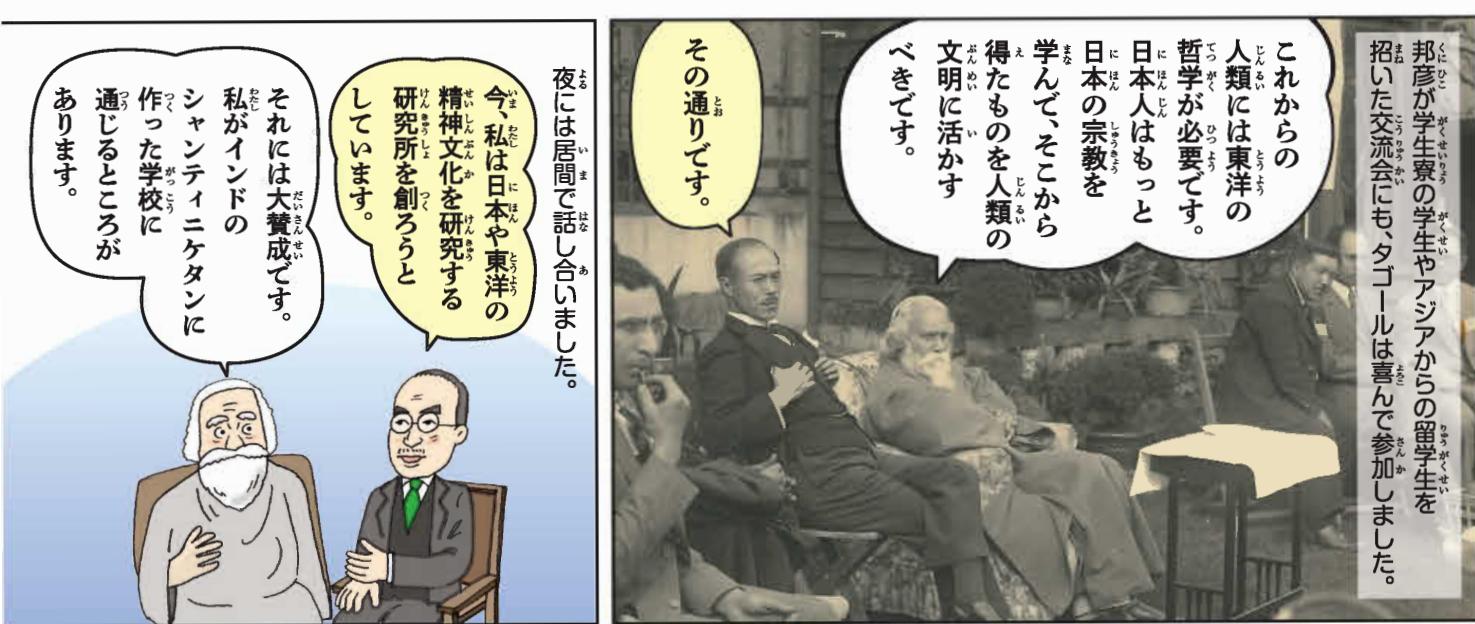
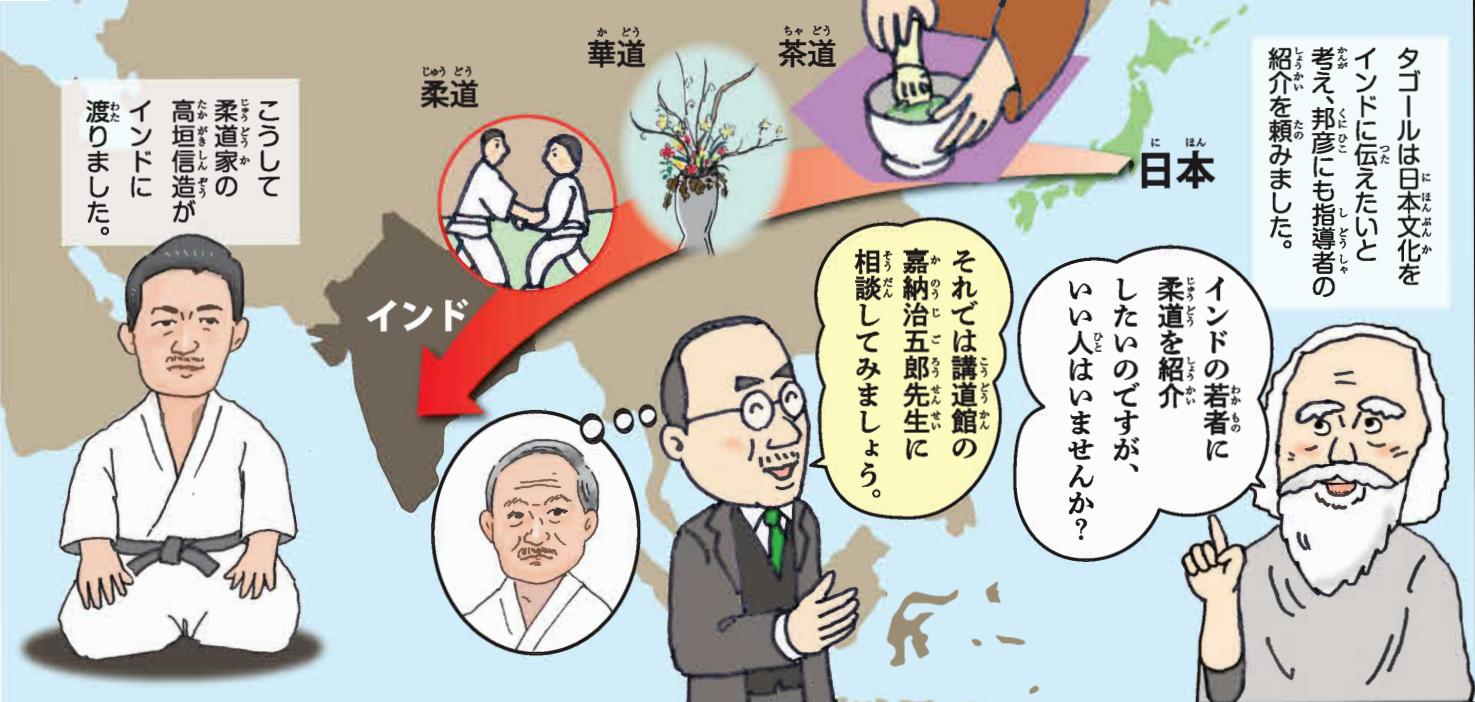
農場での作業

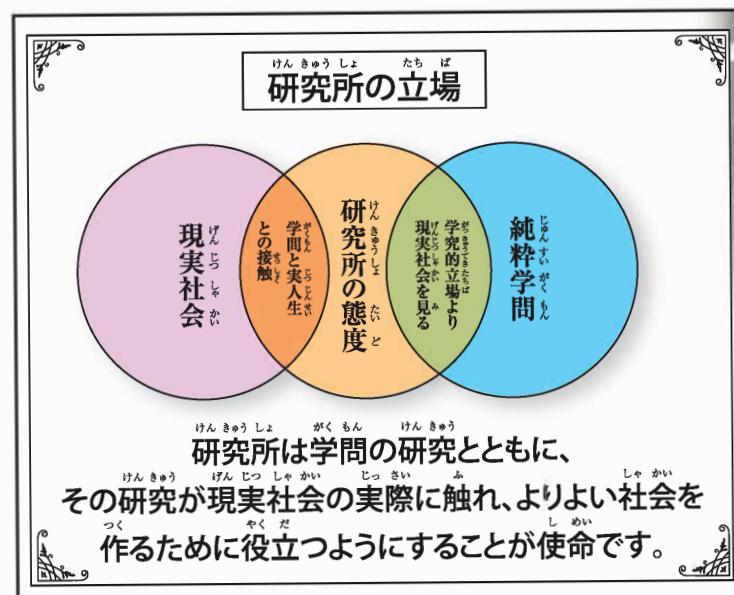
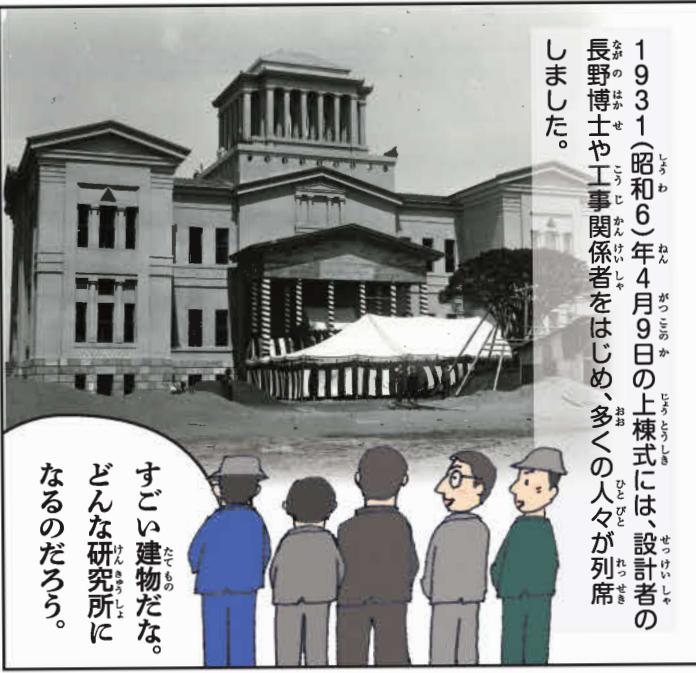
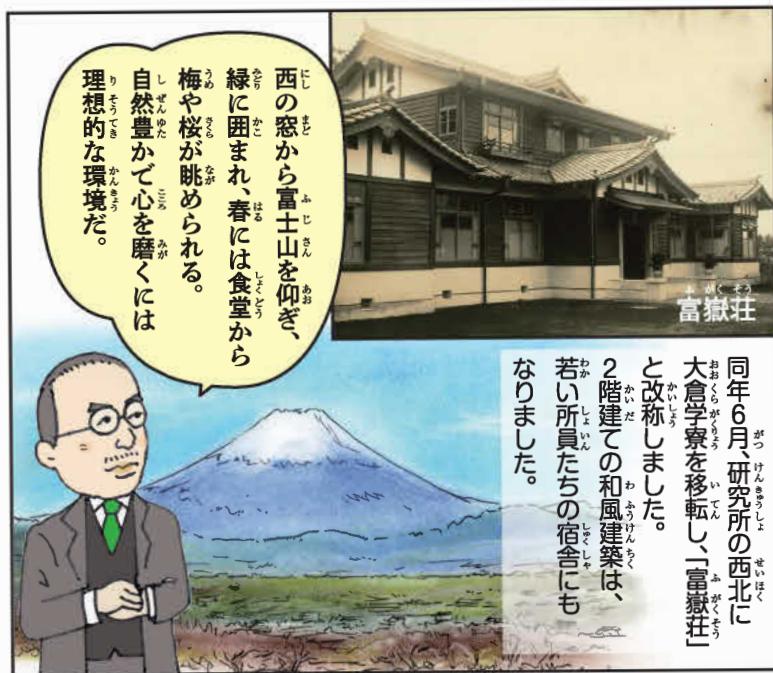
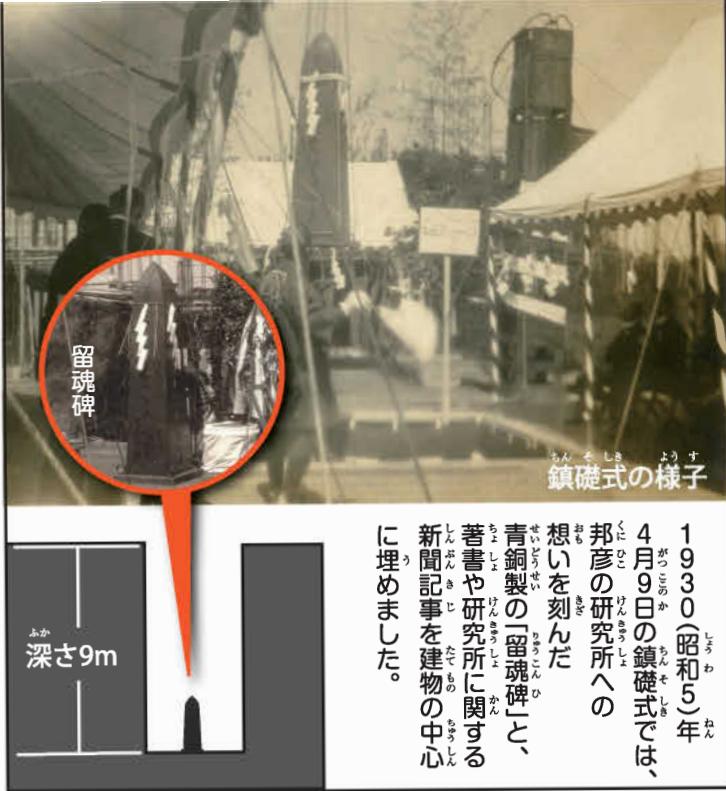


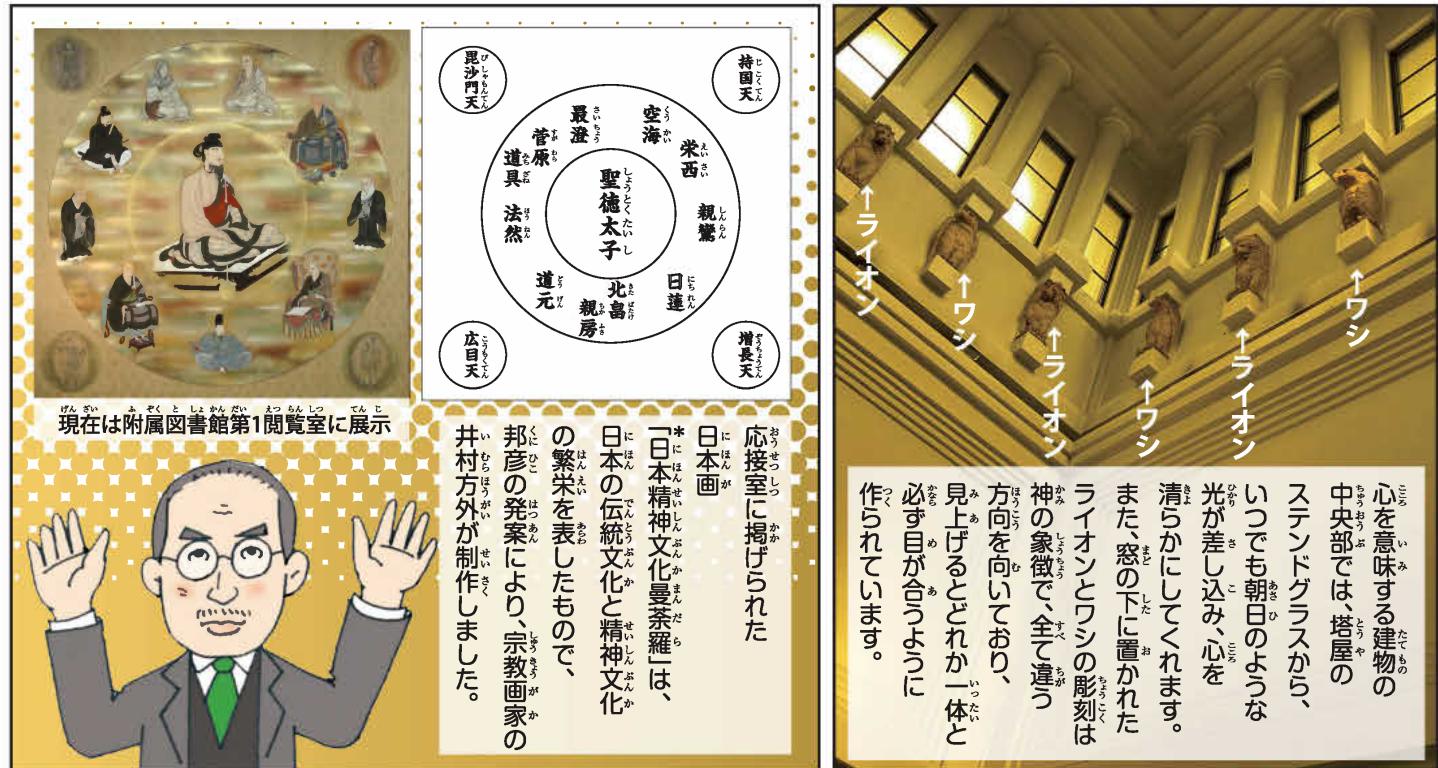
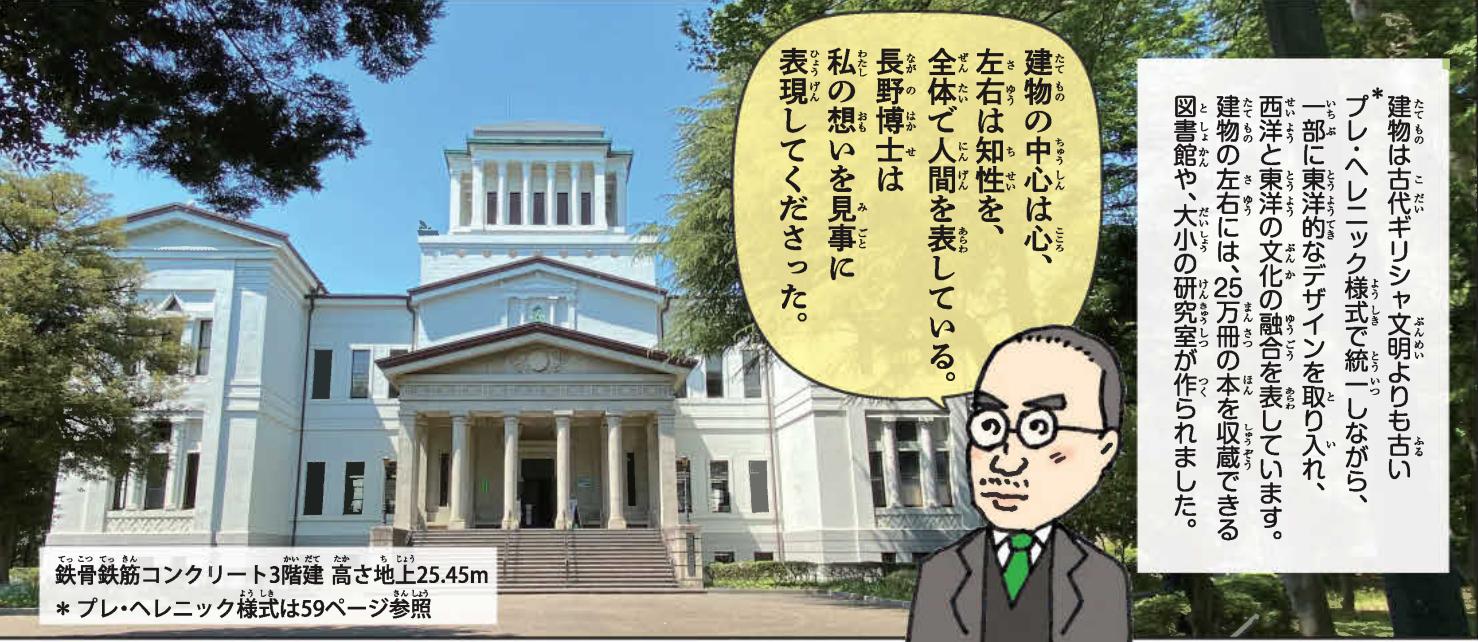
それから3ヶ月後のある日、親交のあったインドの独立運動家ラス・ビハリ・ボースから、ある頼みごとをされました。



滞在中、タゴールは毎朝4時に起床して、2時間、瞑想します。

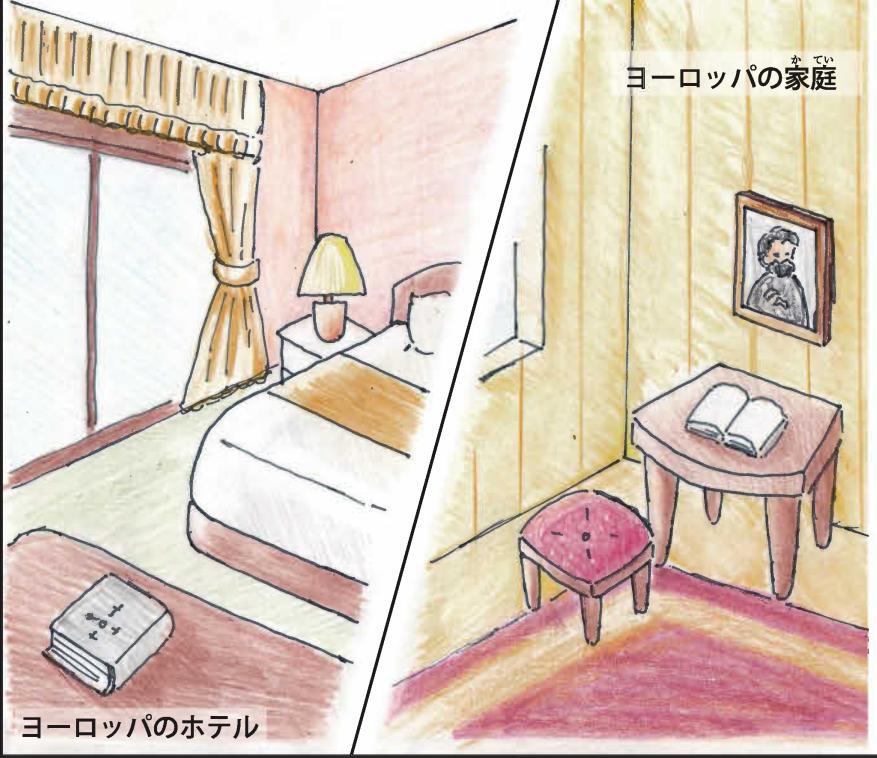




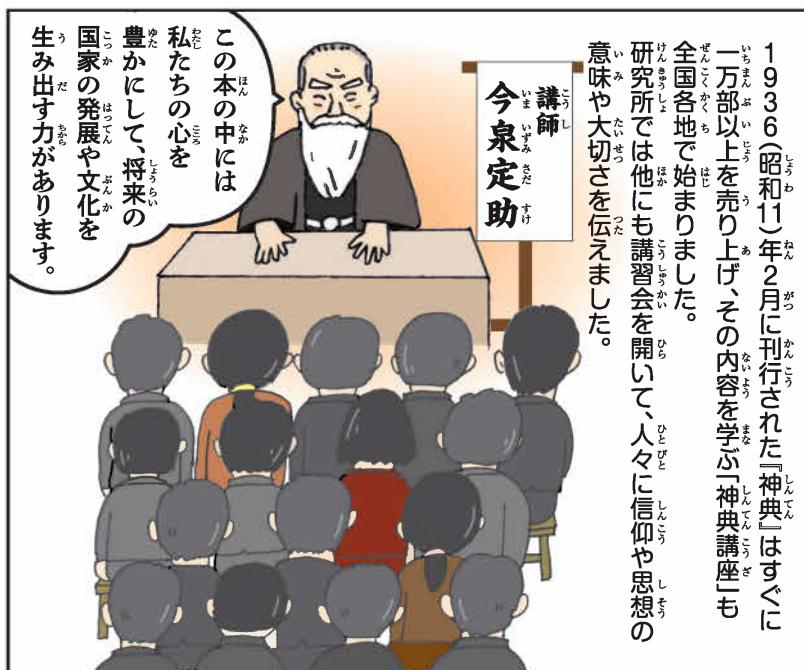


研究所の最初の大きな仕事が、「神典」の編さんと発行でした。これは邦彦のヨーロッパ視察での気づきがきっかけでした。

ヨーロッパの家庭



ヨーロッパのホテル



1936(昭和11)年2月に刊行された「神典」はすぐご
一萬部以上を売り上げ、その内容を学ぶ「神典講座」も
全国各地で始まりました。
研究所では他にも講習会を開いて、人々に信仰や思想の
意味や大切さを伝えました。



この頃の学校教育では、
体験や心の鍛錬が軽視されている。
子どもたちを研究所に泊めて、
魂を磨き、信念を育む実践を行お
う修養会をやってみよう!



1933(昭和8)年夏。研究所の活動を
伝え聞いたある母親から、相談がありました。

修養会では、朝4時30分の起床から夜9時の就寝まで、朝夕の坐禅や庭の整備、清掃などの作業を行いました。



坐禅道場(現大倉山記念館ギャラリー)で坐禅をする子どもたち

作業をする修養会の参加者たち

邦彦は子どもたちと寝食をともにして、集団生活の心構えや作法、両親や兄弟に対する態度や礼儀について語りかけました。



大倉邦彦と子どもたち。赤い○印が大倉邦彦



邦彦は、1925(大正14)年以来「感想」を年一回発行していましたが、読者からの要望もあり、1934(昭和9)年3月、月刊誌「躬行」を創刊しました。



聞くところによると、偉い社長さんらしいのに、一緒に汗水流して行動するんだなあ。

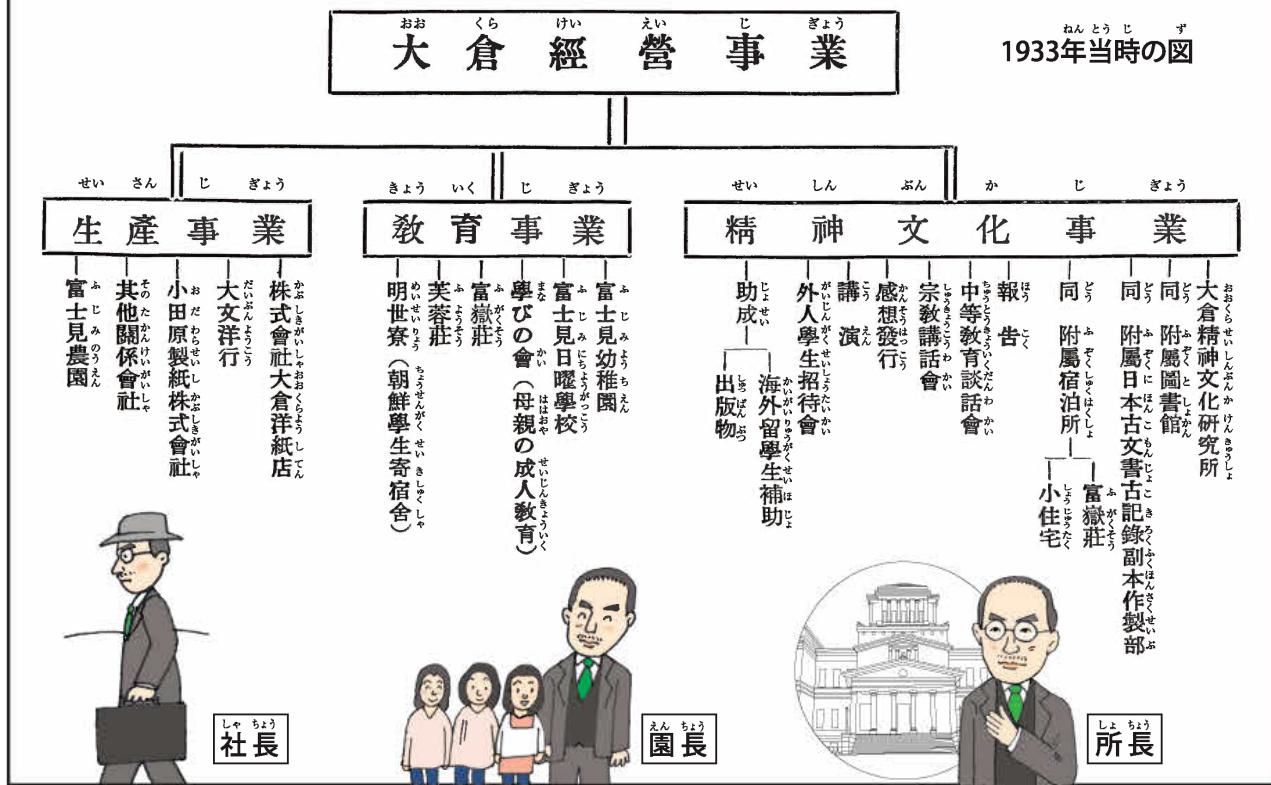
修養会はやがて研究所の事業の中心となり、学校の先生や企業向けにも行うようになりました。

わかりました。
大倉山婦人修養会を開きました。

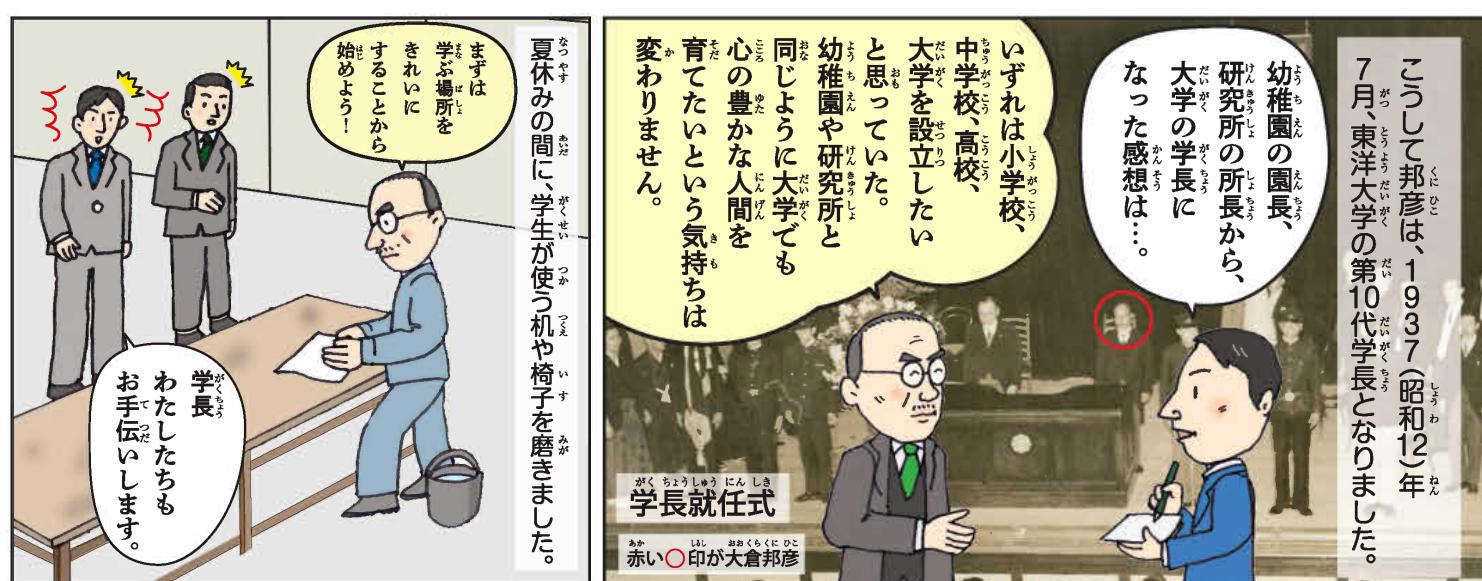
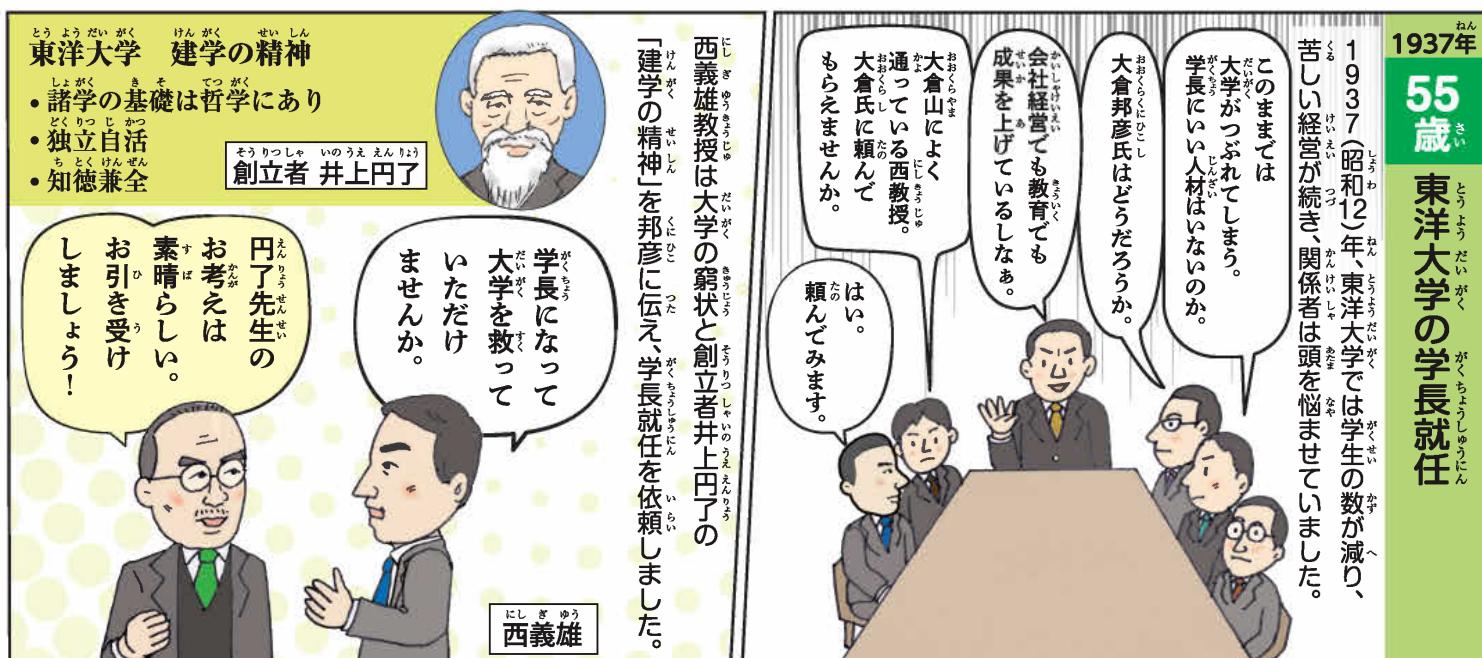
子どもの態度がすっかり変わって驚きました。
私たち母親も学びたいです。

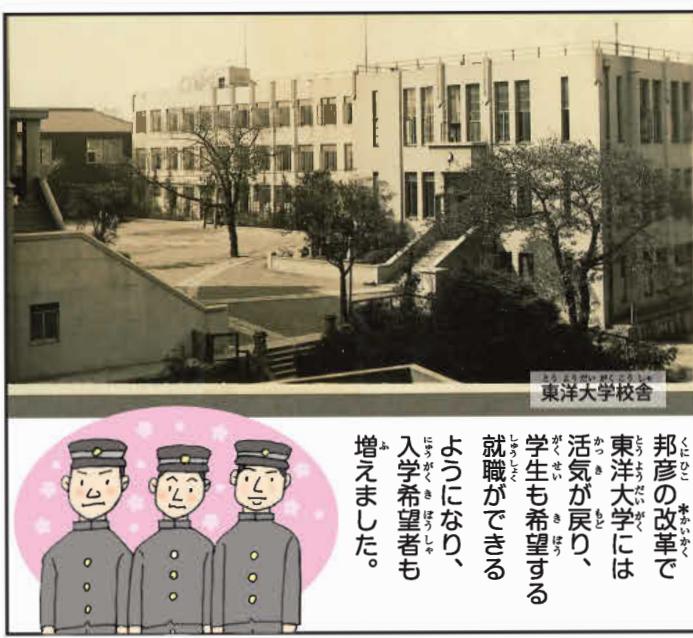
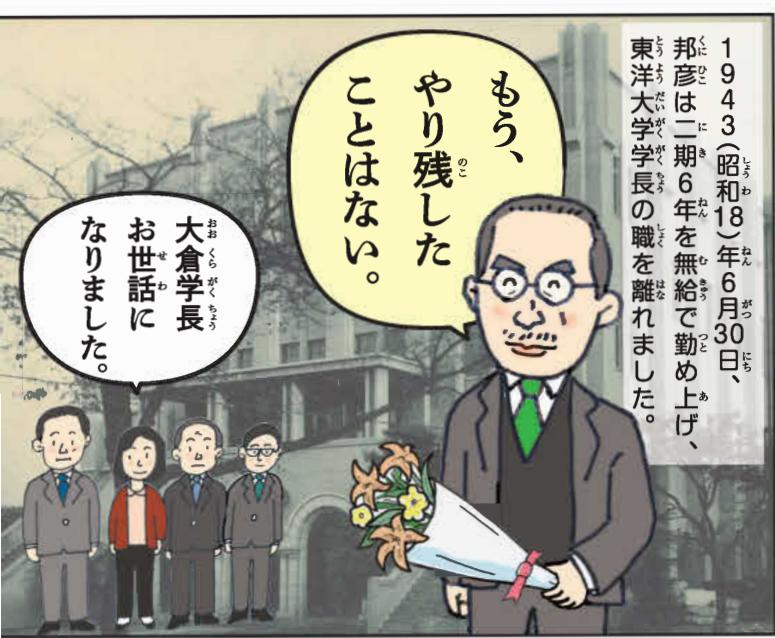
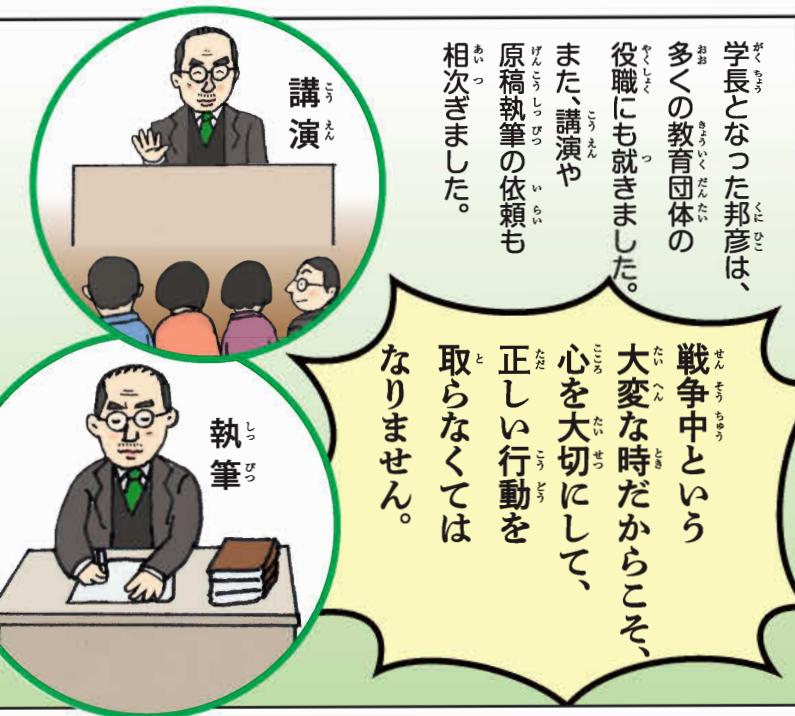
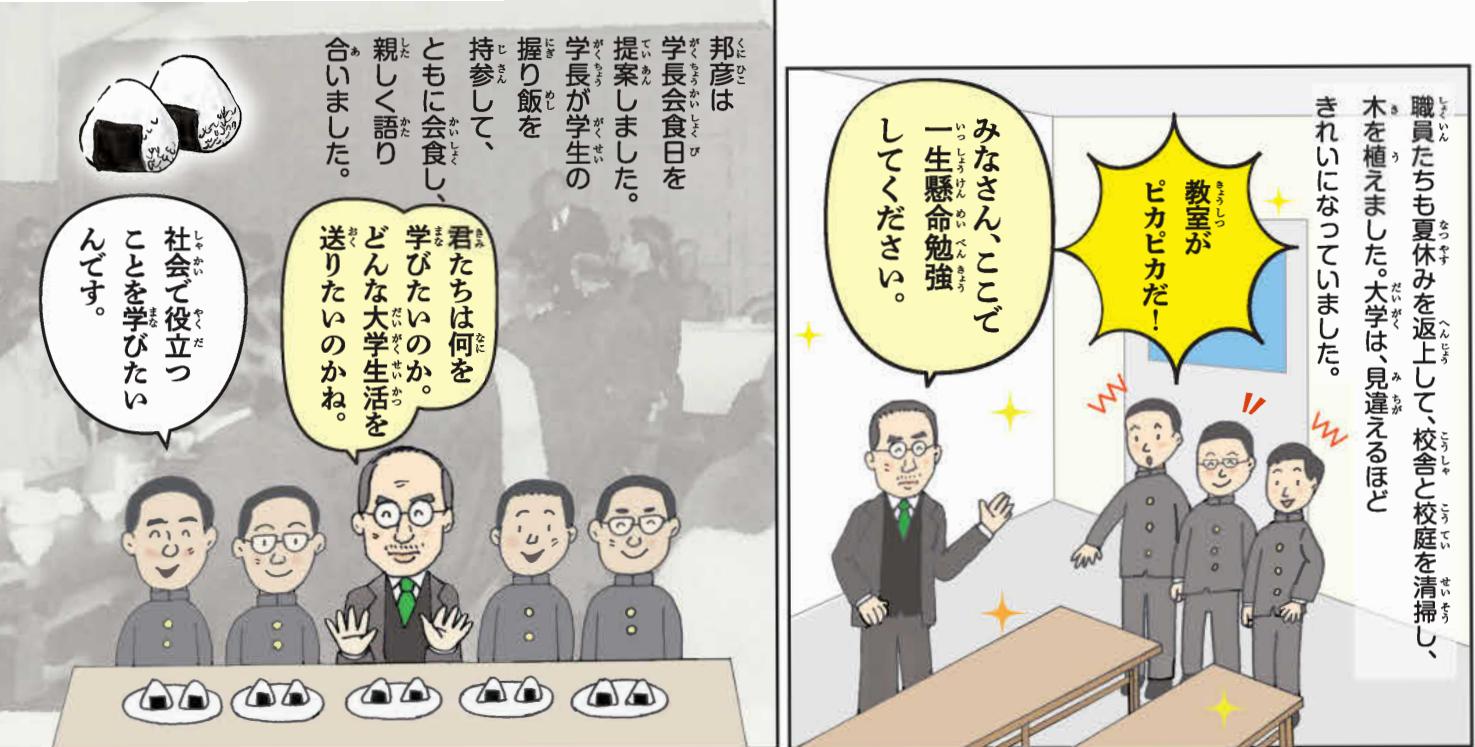


1933年当時の図



邦彦は自分の使命を「大倉経営事業」として整理し、多忙な毎日を送りました。





1944(昭和19)年5月。戦争が激しくなる中、邦彦は、空襲に備えた東京都の要請を受け、富士見幼稚園を休園しました。その後幼稚園は、再開叶わず、閉園となりました。

